

潜在的能力から共通の運命へ

浜 野 研 三

本論文は出生前診断後の選択的中絶や尊厳死など様々な生命倫理の問題を考える際に直ちに問題となる 道德哲学の根本に関わる問題について、コーラ・ダイヤモンド(Cora Diamond)の諸論文に触発された立場から一つの可能なアプローチを提出する試みである⁽¹⁾。そのため、中絶問題を巡る議論を例にとり、それらの理論を論じつつ当のアプローチの内容と意義を説明する。論述の順序は以下の通りである。まず、中絶問題に関わるパーソン論の議論と、それに対する胎児の潜在的能力の存在に依拠する議論を素描する⁽²⁾。その際、後者の批判の際によく用いられるファインバーグ(Joel Feinberg)の批判を紹介すると共に、ファインバーグの反論の不十分さを指摘し、潜在能力概念を用いた議論が、ファインバーグが提出したような単純な議論によっては退けられないことを示す⁽³⁾。次に、潜在能力概念を用いた議論のより明確の展開されたものとしてシュオルツ(Schwartz)の立場を紹介する⁽⁴⁾。そして、潜在能力概念を用いた立場がパーソン論に優越しながらも結局同様の根本的問題点を共有していることを指摘する。その問題点とは何よりもそれらを支える 道德的思考内容の不十分さ、より端的に言えば、貧困さである。実際、中絶の是非に関わる上記の議論の批判は直ちに、道德的態度の基盤という道德哲学の根幹に関わる問題に向かわざるを得ない。そして、その問題に関するダイヤモンドの立場を説明しつつ、パーソン論的立場の貧困さを明らかにし、同時に、生命倫理の議論をどのような方向に導くべきかについて一つの明確な方向を示す。

まず、中絶の是非を巡る論争の中で提出されたいわゆるパーソン論とそれへの反論としての潜在的能力を基盤とする議論の素描である。

1. 中絶の是非論争における「パーソン」概念

周知のように中絶の是非を巡る論争の中で、中絶賛成派の中から「パーソン」概念を用いた一連の中絶容認の議論が提出された、その様な議論には細部において多くの相違

が存在するが、それらに共通する基本的な内容は以下のようなものである。

- a. 人間という概念には、ホモ・サピエンスという生物学的な種を表す概念である「ヒト」概念と非生物学的な「パーソン」概念という両義性が存在する。
- b. 道徳的な思考で重要な役割を果たすのは単なる生物学的な概念であるヒト概念ではなく「パーソン」概念である。具体的には、たとえば、生命への権利を有すると正当に認められるものはヒトではなくパーソンである。ホモ・サピエンスという単に一つの生物学的な種に属することは道徳的に意味のあることではない。そのような単なる生物学的事実に道徳的な重要性を付与することは、人間が正当な理由なしに自己の固有の属性に道徳的な意味を付与することであり、人種差別主義と同様の意味で、種差別主義(speciesism)と呼ばざるを得ない。
- c. 「パーソン」概念は自己意識、過去・現在・未来という時間意識等の基本的な概念的思考能力を持つ存在にのみ正しく適用される。したがって、ヒトの中にもパーソンでないものも存在するし、逆にヒトでないものの中にもパーソンであるものが存在し得る。すなわち、人間の胎児は明らかにヒトであり人間であるが、上記の能力を持たないのでパーソンではなく、他方、もしチンパンジーが上記の能力を持っていることが確認されれば、チンパンジーはパーソンであることになる。
- d. したがって、ヒトでありかつパーソンである人間の生命を抹殺することは道徳的に許されないが、ヒトではあるがパーソンではない胎児の生命を抹殺することは許される。

このようにパーソン論は中絶の是非を巡る論争の中で中絶擁護のための議論として提出され一定の役割を果たしたのである。このようなパーソン論の議論に対して多くの批判がなされたが、最近のアメリカでの脳死概念を巡る議論を見てみると、一定の理性的能力の存在を以て道徳的位置の指標とし、そのような能力の有無によってその存在に対する道徳的態度の必要性の有無を決定しようとする態度が根強く存在していることが分かる。その意味でパーソン論的アプローチの批判は終わっているどころかいいよその重要性を増していると言わざるを得ない。

2. 潜在的能力概念を用いてのパーソン論批判に関する

ファインバーグによる批判

中絶論争におけるパーソン論的アプローチに対しては様々な反論がなされたが、その典型的なものの一つが、潜在的能力概念を用いた反論である。その様な立場に対してファインバーグがその後よく用いられるようになった反論を提出している。その基本的な内容を次に素描する。まず、ファインバーグによる潜在的能力概念に基づく立場の定式を述べる。この定式は潜在的能力概念に基づく立場のより洗練された型のものの定式である。

- a.胎児は確かにパーソン論者が道徳的考慮の対象であることを示す指標とする能力を持っていないが、胎児は通常状況下においては自然な発達過程を経てパーソンとなる潜在能力を有しており、その意味で潜在的にはあるが当の能力を持ち、潜在的にパーソンと言ってもよい。そして、発達が進むにつれて次第により高く大きな道徳的位置を占めるようになる。
- b.胎児は潜在的パーソンとして、弱められた形であれ、パーソンが有する権利や道徳的位置を反映した道徳的考慮の対象としての位置を持っている。
- c.したがって、胎児の生命を抹殺することは道徳的に許されず、中絶も許されない。

このような議論に対してはファインバーグは単純な論理的反論が可能であると述べる。彼は、「潜在的なアメリカ大統領はそのことを根拠として軍の最高司令官であることにはならない。」というベン(Stanley Benn)の言葉を引用しそれを「潜在的能力に関する論理的論点」と呼んでいる⁽⁵⁾。ここで彼が論理的というのは、潜在的能力とその現実態と間には明らかに論理的ギャップがあるという論理的事実に依拠した論点であるからである。そして、この論点が上記の立場にも妥当し、漸進的にパーソンに近い存在である事実からパーソンが有する権利のいわば弱められた形での権利をその存在が有するという推論は妥当しないと結論する。しかし、この結論を導くために彼が提出した議論は単に一つの例を採り上げてそこから一気に結論を導くという粗いものであり説得力を持たない。それどころか、後に述べるように、その例は潜在的能力を用いた立場を強化するために使用出来るのである。その例とは、1930年のジミー・カーターは確かに潜在的なアメリカ大統領であり、フランクリン・ルーズベルトは同様に潜在的なアメリカ大統領であるが、2年後の1932年に大統領になるルーズベルトの場合はカーターよりもよ

り強い意味で潜在的な大統領ということが出来るが、結局カーターもルーズベルト共に、現実の大統領が持つている実際の大統領権限を持たないことでは変わるところがない、という事実である。このことからファインバーグは潜在的能力の漸次的実現という事実を踏まえたより洗練された潜在的能力概念を用いた立場も中絶反対派に彼等が望む結論をもたらさない、と結論するのである。このファインバーグの議論は上にも述べたように粗いものであり、それが潜在的な能力概念を用いた議論に対する批判の定石となっているのは不思議であると言ってよい。次にそのファインバーグの議論の批判を述べ、より根本的な批判への準備とする。

3. 潜在的能力概念の有効性—ファインバーグの批判の不十分さ

ファインバーグの批判は一つの誤った前提に立っている。その前提とは、潜在的能力概念に基づく立場は現実のパーソンが持っている権利や権限のすべてを潜在的パーソンも弱められた形ではあれ持っている主張している、という前提である。そう考えねば、ファインバーグやベンが全軍の最高司令官としての権限などの少数の例から直ちに潜在的能力概念を用いたアプローチを退けている事実を説明することは出来ない。しかし、その様な前提は当のアプローチにとって不可欠なものではない。たとえば、1992年9月アメリカ大統領候補者であったクリントンは確かに様々な大統領特権を持っていた。アメリカの陸海空軍の最高司令官としての権限は現実の大統領であったブッシュに属していたのである。しかし、大統領候補者であったクリントンにその事実に基づく何らかの特権が付与されていなかったかというそうではない。たとえば、クリントンには身辺警護がついたが、それはまさに彼が大統領候補者であること、すなわち潜在的大統領であることから可能になったのである。そこでは大統領の職務の重要性に応じた権利が潜在的大統領に付与されているのである。権利ではないが、他の候補者と共に全米に向けたTV討論会に招待されそこで自らの意見を述べる機会を与えられるのも、まさにクリントンが潜在的大統領であることから可能になったのである。これらの事実は、潜在的なA(PA)もその現実態であるAの権限の反映としてそれらの権利や権限を(弱められた形で、ないしより少数という形で)持つこと、そして、そのことに応じたPAの取り扱いがなされることが事実として成立可能であることを示している。

さらに、潜在的能力概念を用いたアプローチの説得力を高める事実として、1992

年11月の大統領選後から1993年1月の大統領就任まで、クリントンは大統領就任予定者としてより大統領に近い取り扱いを享受することになる。その中には大統領として必要とされる基本的な情報や就任準備のための費用を行政府から受け取るという特別な取り扱いもある。まさに、PAがよりAに近づけば近づくほどそれに対する取り扱いのあり方がAに類似したものに近づくという事態が存在するのである。皮肉なことに、潜在的能力概念に基づくアプローチに対する反論で用いられた例が、その意図とは逆の結論を強化するものとして用いられるのである。

このように、潜在能力概念を用いた議論は、類似性の度合いをどのように考えそれらにどのような道徳的な重みを付与するのかという困難な問題を持ちつつも、とにかくファイバーグの提出したような単純な反論によって一蹴されるものではないことは明らかである。実際、潜在的能力の実現という人間の発達、したがって、人間の生の時間性とその事実の道徳的意味への着目は、人間の生の現実のあり方に根ざしたものであり、われわれの多くが共有している道徳的直観に合致している。その意味で、潜在能力概念に基づく立場は典型的なパーソン論の立場よりも豊かな内容を持った立場であるということが出来よう。1973年のアメリカ連邦最高裁のロー・v.ウエイド判決もそのような共通の直観に合致している形で、胎児の発達段階を3つに分け、時間の経過・発達の段階に依じて、それぞれに異なった道徳的重みを付けた判断を示したのである⁶⁾。

4. 潜在的能力概念を用いた立場の展開—シュオルツの議論

シュオルツは潜在的能力概念を用いた立場の内容をより明確な形で展開している。彼は潜在的能力を巡る概念を3つに分けている。それらは次のようである。まず第一に、パーソンとして機能する基本的な内在的能力(the basic inherent capacity)は脳や神経システムという物理的基盤を持ち、子どもの成長・発達につれて発達する。この基本的な内在的能力が直ちに十分に発揮可能な場合、それは現在の直接的な形(present immediate form)で存在する。他方、可逆的な昏睡状態にある時には、したがって、存在するが一時的な損傷のゆえに機能しない場合、潜在的1型能力(latent-1 capacity)と呼ばれ、発達途上にある故まだ十分に能力を発揮できない場合は、潜在的2型能力(latent-2 capacity)と呼ばれている。シュワルツはこのような分類の後、基本的な内在的能力を有する存在は、潜在的1型能力であれ潜在的2型能力であれ、パーソンとしての潜在的能力を持ってい

ると述べる。そして、受精卵もまだ全く未発達な状態であるとはいえ、物理的基盤を持っており、その意味でパーソンとしての潜在的能力を持っていると述べる。さらに、シュオルツはそのような物理的基盤の存在とそれを有する存在の連続性を根拠として、それらがパーソンであると主張する。彼は、存在の連続性(the continuum of being)、本質的構造の連続性(the continuum of essential structure)、諸能力の連続性(the continuum of capabilities)という3つの事実を挙げ、自らの主張を説得力あるものにしようとする。第一のものは時空連続性であり成人の私とえい児の私、そして母親の胎内の私はすべて私であり、同一性を保持しつつ成長・変化を遂げてきたのである。二番目は基盤的内在的能力を支える物理的構造は連続性を保持しつつ同一の存在の内にあり続け、様々な能力の発現を可能にしている。最後のものは、パーソンとして機能するために必要な事柄を習得する能力は既に受精卵の中に存在しており、基本的な同一性を保持しつつ、その存在の発達の軌跡の中で機能し続けるのである⁽⁷⁾。筆者はこのようなシュオルツの議論は説得力を持っていると言わざるを得ない、と考えている。実際、適切な脳と神経システムを形成するための基本的な遺伝情報は胚の段階から内在しているのである。無論、そのような遺伝情報がその後の成長のあり方を決定するわけではないことは言うまでもない。そのような遺伝決定論は非科学的であることは次第に科学の常識になっているといっても過言ではない。しかし、そのような遺伝情報がそれを持つ個人の基本的な内在的能力の発達を支え、同時に個人の同一性の決定に重大な役割を果たしていることもまた異論の余地はない⁽⁸⁾。

パーソン論の立場は現在の直接的な能力にのみ、パーソンであるかどうかを決める際の指標としての役割を認めるという意味で道徳的意味を認め、それを支えている物理的基盤の存在、そしてそれに基づく潜在的な能力の存在とそれに基づくあり方の連続性を持っている道徳的意味を無視しているのである。このような立場においては、能力の実現の偏重という明確な価値判断がなされている。それは単に合理的立場から見れば当然受け入れられるべき判断、シジウィックの表現を借りれば、「宇宙の観点から」の公平中立な判断であるのではないのである。このような一定の道徳的立場からの実質的な判断にシュオルツは異を唱え、筆者はそれに賛成するのである。

筆者の立場からすれば、潜在的能力の存在を無視し、能力の実現にのみ道徳的意味を認める見方は偏った人間観、狭い人間観に基づくものであり、われわれの道徳的判断の内容を貧困化するものである。それに対し、潜在的能力概念を用いた議論が採っている

方法、すなわち、時間の中での人間の成長・変化の軌跡とその道徳的意味の考慮は、人間の生に関する様々な道徳的判断にとって極めて有効な視点であるということが出来る。以上のように、潜在的能力概念を用いたアプローチはパーソン論的議論よりもより人間の生について現実に近い理解に基づいたものとして評価されるものであるということが出来る。しかし、次に述べるように、このアプローチもまたパーソン論的アプローチと同様の欠点を抱えており、その欠点を乗り越えた視点に立たない限り、如何に細部を整えたとしても、実際の道徳的思考の理解とその充実に貢献することは出来ないのである。

5. パーソン概念の抽象性・貧困さ

一代案としての「魂に対する態度」と道徳的想像力

パーソン論もそれに対する反論として提出された潜在的能力概念に基づく議論も共に重大な欠陥を抱えており、それがそれらの議論に対して多くの人々が持つ明確な不満、どこに問題があるかを分節化出来ないが何かしらその議論に安住出来ない気分を生んでいる。それらの立場の問題点はそれらの中心にある人間観、そして人間の生のあり方に関する理解の抽象性、狭さ、貧困さに発している。それが具体的にどのようなものであるのかを考察することがこの章の課題である。

まず何よりも指摘されるべきなのは、自己意識等の一定の理性的能力という対象の現在的能力・機能によってその対象の道徳的位置を決定するという、パーソン論の根本的な態度が批判されねばならない点である。すなわち、現在における能力の実現にのみ道徳的意味を認め潜在的な能力の存在の道徳的意味を無視している点、そして道徳的考慮の主要な対象たりうる能力を理性的能力へと限定している点、という2点においてパーソン論は批判されるべきなのである。前者については前章で触れたので後者の点について言えば、理性的能力に排他的な道徳的重みを付けることは明確に一つの実質的な道徳的判断なのであり、理性的客観的な判断能力の持ち主なら誰もが当然受け入れるべき合理的な判断などでは全くない。以下に述べるように、より豊かな（と筆者には思われる）人間観に立った道徳的判断を下すことも可能であり、まさにそれがよって立つ人間観の豊かさ故に、筆者にはそのほうが望ましい判断であると思われるのである。

前章で述べたように、潜在的能力概念を用いたシュオルツのような立場は前者のような欠点を乗り越えているが、後者の欠点を十分に免れてはいない。すなわち、道徳的考

慮の対象になるものの判定規準として理性的能力の有無に排他的な焦点を当てる態度からは解放されているが、そのことを可能にする議論が今ひとつ明確に展開されていない感が否めないのである。シュオルツは次のような言葉でパーソン論の理性的能力への排他的な焦点の当て方に反論している。

「われわれがある人を愛するとき、われわれが愛しているのはその人の全体(the total human being)であり、単に、理性やパーソンとして機能することを可能にする能力ではないのである。われわれは身振りや、表情、声の調子、目の動き等、多くの仕方で表現されるその人の存在のあり方を愛するのである。これらは、もちろん、ある点で、身体が示す特徴である。この事実はこれらのものをシンガーやトゥーリー等が退けた意味での単なる生物学的な特徴にするわけではない。それらはその人間的パーソン全体の様々な次元なのである。」⁽⁹⁾

シュオルツはパーソン論的立場の道徳的内容の貧困さを指摘し、それに代わる方向を示唆しているが、その方向を明確にかつダイナミックに展開することはしていない。また、彼の代案の道徳的内容の豊かさを十分明らかに展開できないでいる。その点で、シュオルツのような潜在能力概念を用いた立場にも不満を持たざるを得ないし、そのような立場は説得力に欠けると言わざるを得ないのである。

それに対し、ダイヤモンドは想像力と人間の共通の運命に対する共感をキーワードにしてパーソン論的立場に代わる道徳的思考の目指す方向をより明確かつ説得力ある仕方で展開している、と筆者は考えている。パーソン論的議論では想像力の欠如した、その意味で極めて乾いた道徳的感性が「理性的合理的」な思考の衣をまとして、自らの優越性を誇っているように見える、しかし、そのような乾いた、括弧を付けざるを得ない合理性・理性的思考は実は想像力の欠如、ないし意図的な切り捨てによる貧困化した道徳的思考とそれに基づく判断を生み出しているのではないのか、というのがダイヤモンドの批判の核である。彼女の立場は次のようなものである。

ダイヤモンドの立場の基盤をなすものは、人間が他の人間に対するとき否応なしに一定の態度をとる事実の意味の深刻な理解である。それはワイトゲンシュタインが魂に対する態度と呼んだ態度であり、ストローソンはそれを参加反応的態度(participant reactive attitude)と呼んだ⁽¹⁰⁾。それは相手が意図や意志や感情を持ち、喜んだり悲しんだり等々の、まさにわれわれが通常「人間的」という言葉で表現する様々な反応を見せる存在であることを前提としたかのような態度である。そしてそのような態度はワイトゲンシュタイ

ンが述べるように、われわれがそのような信念を持っている故に見せる態度ではないのである。われわれはそうに振る舞ういわば原始的な傾向を持つ存在なのであり、そのような傾向がまず存在することによって、上記のような信念やその内容を形づくっている人間についての概念が成立しわれわれ人間の生活の中で役割を果たしうるのである⁽¹¹⁾。まず自らの振る舞いのあり方についての概念的な理解から出発して自分のあり方からのアナロジーに基づく推論によって他者を人間として認知し、それに応じた態度をとるのではないのである。このようなまず無意識のうちに採られる態度の存在についてウィンチがしばしば引用するシモーヌ・ヴェイユの言葉がある。

「人間は、ただその場にいることだけによって、われわれの身体がなそうとする身体運動の各々を停止させたり、弱めたり、あるいは修正したりする、彼等に固有に属する力を持っている。われわれの前を横切る人を避けるためにわれわれが歩く方向を変える仕方は、道路標識にしたがって歩く方向を変える仕方とは異なるのである。部屋に一人でいるときと訪問者がいるときとは、立ち上がった、歩き回ったり、あるいは座ったりする仕方は同じではないのである。」⁽¹²⁾

これはわれわれ人間が明確な自覚のないままに、しかし明確な形で見せる、他人に対する特徴的な態度、身のこなしの存在を的確に指摘したものであり、ウィトゲンシュタインが哲学者にすすめた、事態をよく見ることを実践したものであるということが出来る。また、それは、ヴェイユ自身が事物の真のあり方を明らかにするものとしている、純粋な「注意」を人間のあり方に注いだ結果であるということも出来よう⁽¹³⁾。

ウィトゲンシュタイン、ウィンチ、ヴェイユ、そしてアイリス・マードックなどの洞察を真摯に受けとめ、ダイヤモンドは、上記のような生得的な態度に基づきつつ人間が生軌跡の中で出会う様々な事象の道徳的意味の網の目を紡ぐ形で人間の生一般に関する豊かな概念を作り上げてきている厳然たる事実、の深刻な理解に基づく道徳的思考の豊かな可能性を示唆するのである。人間の生に関するわれわれの理解は数限りない物語、神話、哲学的教説、ことわざ、箴言等々が示すような多様で複雑な理解に支えられている、という事実を踏まえてこそ真に豊かな道徳的思考が可能になる、というのがダイヤモンドの基本的立場である。そういった多様で複雑な理解の中には互いに矛盾しているような内容も多く見られるであろうが、それを単純に論理的に矛盾したものでありどちらかが捨て去られるべきものであるとするのではなく、人間の生のあり方の複雑さを示すものとして、それらの中によりニュアンスに満ちた人間の生の理解の道を探る方がよ

り生産的な態度であると思われる。

ダイヤモンドはそのような人間理解の重要な要素を示すものとして、ジョゼフ・コンラッドの『ナルシッサス号のニガー』への序文の一節を代表的なものとして紹介している。それによると、作家が生み出そうとする感情は「人間をお互いと、そして人類すべてをわれわれが目で見ることが出来るこの世界へと結びつける、避けることが出来ない連帯に関する感情、すなわち、神秘的な起源、労苦、喜び、希望、不確かな運命を共にすることに基づく連帯の感情 that feeling of unavoidable solidarity ; of the solidarity in mysterious origin, in toil, in joy, in hope, in uncertain fate, which binds men to each other and all mankind to the visible world」なのである⁽¹⁴⁾。ダイヤモンドは他にもディケンズやナサニエル・ホーソンやジャック・ロンドン等の作品からの引用を用いて自らの議論の内容をより具体的にまたヴィヴィッドに伝えている⁽¹⁵⁾。しかし、その基本的な内容はこのコンラッドの言葉の中に明確に示されている。

そこに見られるものは、様々な可能性を持ちながら限られた時間の中で様々な軌跡を描く人間の生のあり方とそのような生を共有しているすべての人間に対する連帯の感情である。そこには人間の生の神秘に対する謙遜な想いが示されている。このような神秘への畏怖の念を悪しき神秘主義、ドグマチックな宗教への誘惑を示す罠であると忌避することは、35億年の生命の歴史の中で生まれ意識能力という稀で不可思議な能力を所有する極めて複雑な身体を持つ生命体である人間という動物の、実際に不可思議なあり方から目を逸らせることであり、出来うる限り実在の多様で複雑なあり方をその実際のあり方の即して理解するという、正しい意味で理性的な探究の態度に反する態度である。とにかく、少なくとも、現在の人間の身体能力そして理解能力の時間的空間的制限を考慮すれば、人間にとっては途方もない規模のマクロ・レベルとミクロ・レベルで生じる複雑な過程の中の、人類のそしてまた各個人の複雑多様な物語に畏怖の念を禁じ得ないのもまことに当然といわざるを得ないのである。

ダイヤモンドは「倫理はわれわれ人間存在について意味のある何事かを示すものとしてわれわれを打つすべての事物から生じるのである」と述べている⁽¹⁶⁾。我々の道徳は上で述べた無意識の態度・反応を基本的な材料とし、人間の生の軌跡の中に現れる多くの事物への十分な注意によるそれらの道徳的意味の理解と想像力による展開・深化を経て形成されるべきものである。したがって、「多様な事物の意味・・・一般的に、いかなる幸運も傷つきやすい事実と、個別には、われわれの身体の脆さ等」⁽¹⁷⁾がわれれの

人間の振るまい、そしてわれわれの倫理の内容を規定しており、そのような事実の意味を踏まえたものではない道徳的思考や判断は極めて不十分なものであると言わざるを得ないのである。実際、他人が一般的な意味で人間的な反応を示すことを理解しているだけでは十分に道徳的態度とは言えない。そのような理解を持った人間が極めて残酷であり得るのである。たとえば、奴隷を身体的かつ心理的に苦しめる奴隷所有者は奴隷を石ころのような物理的対象としてのみ扱っているのではない。しかし、そのような人間の生には、脆さと同時に積極的な可能性を担う存在に対する共感、豊かな想像力と注意によって生氣を与えられる共感によって裏打ちされた道徳的判断の確かな基盤が欠けているのである。

ひるがえって考えれば、パーソン論や上記の潜在的能力概念を用いた立場は、そのような広く深く人間の生のあり方に想いを致すことから生まれるより実際の人間の生のあり方に即した立場と異なり、極めて狭い人間観、人間の生の理解に基づいたものであり、そのことがそれらの立場に対する分節化出来ないが明瞭に感じられる不満、何かが欠けているという明瞭な不満を生みだしているのである。

以上のように、想像力による、生まれつき備わっている魂に対する態度の質と量における深化・拡大、それによって生まれる道徳的感性の分析・理解、そしてそのより一層の深化・拡大を不可欠の要素として持つ思考の展開こそが道徳的思考の目指すべき方向なのである。このような思考に裏打ちされてこそ、われわれの道徳的判断はより納得できるものとなり、われわれの生を豊かにすることが出来るのである。生命の価値の問題に直面せざるを得ない生命倫理においてはなおさらこの方向での一層の努力がなされるべきなのである。

6. 中絶問題への含意——一つの例として

最後に、このような立場からどのような具体的な道徳的立場が生み出されるのかを示す例として障害を持つ胎児の中絶の問題を考えてみる。そのような立場からまず強調されるべきことは、障害を持つ胎児も人間であり、障害を持つ生がその人間の生である事実である。この事態においては、ある能力が不可逆的な形で失われているが、その生が具体的にどのような実質的な内容を持った生の軌跡を描くのかは極めて不確かな場合が多い。とにかく、そのような存在に対してはまず、人間としての連帯感に基づく対応が

要請される。そして、次に、われわれはどのような社会を作り住むことを望むのか、という問いに答えねばならない。もし、障害を持った人々もそうでない人々も、同様に複雑精妙なメカニズムから成り立っている人間の身体を持ちその身体の脆さを共有している、という共通の運命を担っている存在である事実の道徳的意味にわれわれが想いを致したとしよう。さらに、われわれが、障害者であれ健常者であれ、出来る限りその生命が持っている様々な潜在的な能力を調和的に発達させ実現し充実した生の軌跡を描くことが出来るような社会に住むことを望むとしよう。もし上記の問いに、このような答えを出すならば、決断を迫られている当の女性やそのパートナーに対する情報の提供を初めとする様々な社会的な支援が与えられる制度が設けられるよう、政治・経済・社会の構造改革を目指しつつ社会に対してわれわれが働きかけていくことが必要になるであろう。ただし、まさに不確かな運命の下で、中絶に踏み切りざるを得ないと当事者が判断した場合にそれを一律に法律等によって無視することは、中絶を一律に禁止することと同様、複雑で傷つきやすい人間の生の現実から目を背けた、したがって、人間の生に対する愛情に満ちた注意を注ぐことによって得られる認識とは異なった、その意味で人間の生に対する尊敬と連帯の感情を欠いた、道徳的な判断としては劣ったものであると言わざるを得ない。

このように、人間の生の複雑な軌跡の織りなす様々な事象の道徳的な意味に対する注意深い理解とそれに支えられた想像力によって生み出される人間の生に関するヴィジョンは人間の生についての抽象的で狭隘な理解から生み出される道徳的判断の欠点を明らかにし、それに代わるより豊かで有効な視点を提供しうるのである。ただ、このような視点からの議論が多くの人が納得できる具体的な問題解決のための公共的なルールを直ちに提供できるかという点、大いに疑問である。しかし、リベリズムが推奨する公平・中立・形式的なルールが真にその機能を発揮するためには、その実際の適用を的確なものとする実質的な道徳的判断能力が不可欠であり、そのような実質的な道徳的判断能力を育成しその維持発展を支えるものが上記のヴィジョンなのである。人間という動物がその生命の可能性を十二分に発揮し豊かな生を送り得るためには、このような想像力に支えられた道徳的立場が社会の中により強固な根を張ることが不可欠である。その方向での努力を支えるものとして、ダイヤモンド的な立場の重要性を否定することは出来ないのである。

註

- (1) Diamond, Cora., “The importance of Being Human”, in Cockburn, David., *Human Beings*, Cambridge University Press 1991 や “How Many Legs?”, in Gaita, Raimond(ed.), *Value And Understanding*, Routledge 1990 や “Rules : Looking in the Right Place”, in Phillips, Z.D and Winch, Peter(eds.), *Wittgenstein : Attention to Particulars: Essays in honour of Rush Rhees(1905-1989)*, Macmillan 1989 及び *The Realistic Spirit*, MIT Press 1991
- (2) 周知のようにパーソン論の代表的論者としてマイケル・トゥーリー(Michael Tooley)やメアリー・アン・ウォーレン(Mary Ann Warren)がいる。彼等の議論については、Feinberg, Joel (ed.), *Problems of Abortion*, 2nd edition, Wadsworth Publishing Company 1984 所収の論文を参照。
- (3) Feinberg, Joel. “Potentiality, Development and Rights”, in Feinberg, Joel (ed.), *Problems of Abortion*, 2nd edition, Wadsworth Publishing Company 1984
- (4) Schwartz, Stephen., “Personhood Begins at Conception”, in Pojman, Lois P. and Beckwith, Francis(eds.), *The Abortion Controversy : A Reader*, Jones and Bartlett 1994
- (5) Feinberg, Joel. “Potentiality, Development and Rights”, in Feinberg, Joel (ed.), *Problems of Abortion*, 2nd edition, Wadsworth Publishing Company 1984, p.145
- (6) Planned Parenthood v. Casey においてこの三段階の分析は退けられた。
- (7) Schwartz, Stephen., “Personhood Begins at Conception”, in Pojman, Lois P. and Beckwith, Francis(eds.), *The Abortion Controversy : A Reader*, Jones and Bartlett 1994, pp.245-246
- (8) 初期の胚の段階における一卵性双生児化の可能性に関する問題についてはこの論文では扱わない。
- (9) Schwartz, Stephen., “Personhood Begins at Conception”, in Pojman, Lois P. and Beckwith, Francis(eds.), *The Abortion Controversy : A Reader*, Jones and Bartlett 1994, p.250
- (10) このウイトゲンシュタインの言葉に関する興味深い議論については、Winch, Peter., “Eine Einstellung zur Seele”, in his *Trying to Make Sense*, Blackwell 1987 を参照。ストローソンの議論については、Strawson, P.F., “Freedom and Resentment”, in his *Freedom and Resentment* を参照。
- (11) Winch, Peter., “Eine Einstellung zur Seele”, in his *Trying to Make Sense*, Blackwell 1987, p.147 を参照。このような理解についてはウィンチの次の論文も有益である。Winch, Peter., “Who is My Neighbour”, in his *Trying to Make Sense*, Blackwell 1987
- (12) Winch, Peter., “Eine Einstellung zur Seele”, in his *Trying to Make Sense*, Blackwell 1987, p.146
- (13) ヴェイユの「注意」概念に影響を受けた哲学者にアイリス・マードックがおり、ダイアモンドはマードックの影響を受けている。マードックの道徳哲学については、Murdoch, Iris., *The Sovereignty of good*, Ark Paperbacks 1985 を参照。
- (14) Diamond, Cora., “The importance of Being Human”, in Cockburn, David., *Human Beings*, Cambridge University Press 1991, p.50

(15) 註 1 の諸論文を参照。

(16) Diamond, Cora., “How Many Legs?”, in Gaita, Raimond(ed.), *Value And Understanding*, Routledge 1990, p.175

(17) Diamond, Cora., “How Many Legs?”, in Gaita, Raimond(ed.), *Value And Understanding*, Routledge 1990, p.176

[名古屋工業大学助教授]